

骨はいきいき 教材に甦らせる骨格標本

長谷川 太一

(ひとはくミュージアムティーチャー)

アルマジロ センザンコウ カモノハシの剥製などは4~5十年前の高等学校の生物室に普通に見られた光景である。その後、科学技術が飛躍的に進歩し、時代が変化し、経済構造も変化し、学習指導要領という基準になる環境も変われば、すさまじい外来種の侵入が始まった。高校教科書ではDNAを手始めにTCA回路やカルビン回路が幅を利かせ、歯式や指骨式などは痕跡すらなくなった。教科書の中でその地位を奪い取られた格好である。さらに、標本の保存技術もないままに傷みがひどくなり修復が不可能になった折に、校舎も老朽化し建替えの建築が進み、さらに阪神大震災以後の校舎の耐震工事なども重なってさすがに剥製でも絶滅に迫いやられた。それでも液浸標本や骨格標本は比較的傷みが少なく、傷んでいても当時の生物部や生徒の作品であったことが幸いし、燃えるごみや大型ごみにはならなくて残っている。しかし、新しい校舎は標本展示のスペースが限られていたり、授業での標本の活用の見通しもなく、扱いに困っている。意外なものが残っていても気付かないか、意外なものが捨てられる危機に瀕している学校の現状を汲んで、博物館で何ができるかを考えてみる機会になることを期待している。

教科「生物」の選択者が減少している中で、生徒が目に触れる感動と実物から得られる納得は知的好奇心をくすぐる効力を十分に持っている。学校にある標本の学術的な価値は定かでないが、教材に甦らせた例を兵庫県立西宮甲山高等学校の校地内で偶然に発見された「ミイラ化したニホンイノシシからの骨格標本(同校生徒・鈴木崇司が作製中・筆者指導)」(写真左)と兵庫県立姫路西高等学校の「家畜の頭蓋骨の標本」を筆者が処理した後(写真右)を示しておく。これらの標本は、熱処理やタンパク質分解酵素による処理、過酸化水素による漂白処理を施した。「家畜の頭蓋骨」は紛失さえなければ何種類かの骨がばらばらに混入していても、骨の各部の分類選別とジグソウパズルのような組み合わせで甦ってくる。また姫路西高等学校の大正2年7月16日・五十嵐晋一の記載のある「ウシの前肢の骨格標本」(写真略)はクリーニング(水洗)と支持台の部品を追加するだけで甦ったが、骨の固定方法などには先人の技術の高さがうかがえる。

